開題

マリ・ド・フランスは聖トマス・ベケットの妹！

原野　昇

Carla Rossi, *Marie de France et les érudits de Cantorbéry*, Editions Classiques Garnier, 2009

マリ・ド・フランスの名前はフランス中世文学史において、クレティアン・ド・トロワとほぼ同時代、一二世紀後半に活躍した女性作家、ブルターニュの題材をもとに作った一二編の「レー」と呼ばれる短編物語（「短詩」とも）からなる『短編物語集』の作者として知られている。南フランスの抒情詩人（トルバドゥール）のなかには何人かの女性トルバドゥール（トルバリッツと呼ばれる）もいたが、北フランスの文学世界では女性作家の嚆矢である。本書は、そのマリ・ド・フランスは聖トマス・ベケットの妹であるという結論を強く示唆する、知的興奮を誘うまことに刺激的な書である。もっともその道の専門家にとってはそれほどショッキングな結論ではないであろうが、大方の読者にはかなり強烈な印象を与えることは間違いなかろう。

四番目の作品

マリ・ド・フランスは右記の『短編物語集』のほかに、イソップの流れを汲む英語の寓話詩をフランス語にした『寓話集』、ラテン語原典をフランス語に翻案した『聖パトリック（パトリス）の煉獄』を書いている。

ところが最近『聖女オドレ（オドリー）伝』もマリ・ド・フランスの手になるものだという説が出され[1]、学界でほぼ認められているようである。実は『聖パトリックの煉獄』に続いてこのような聖人伝を著わすような女性ということも、本書の結論を補強する傍証となっている。ただし未だ多くの文学史では、マリ・ド・フランスの作として前述の三作品しかあげられていない。

「わが名はマリ、フランスの生まれ」

とから英語が堪能だったのは自明であり、育ちについての推測がかなり限定されてくるのである。

「四作品の作者マリ」とは誰か——四つの仮説

「四作品の作者マリ」（通称マリ・ド・フランス）の実像について、歴史上のしかじかの女性が該当するのではないかと、いくつもの仮説が提案されてきた。たとえば、マリ・ド・ムーラン説

パドゥール）のなかには何人かの女性トルバドゥール（トルバリッツと呼ばれる）もいたが、北フランスの文学世界では女性作家の嚆矢である。本書は、そのマリ・ド・フランスは聖トマス（トマス・ベケット）の妹『聖女オドレ（オドリー）伝』もマリ・ド・フランスの手になるものだという説が出され[1]、学界でほぼ認められ

ところが最近『聖女オドレ（オドリー）伝』もマリ・ド・フランスの手になるものだという説が出され[1]、学界でほぼ認められているようである。実は『聖パトリックの煉獄』に続いてこのような聖人伝を著わすような女性ということも、本書の結論を補強する傍証となっている。ただし未だ多くの文学史では、マリ・ド・フランスの作として前述の三作品しかあげられていない。

「わが名はマリ、フランスの生まれ」

『短編物語集』をはじめとする「四作品の作者マリ」とはどのような人物なのか、その生涯について詳しいことは分かっていない。マリ・ド・フランスという名前も、『寓話集』のエピローグに「わが名はマリ、フランスの生まれ（出身）」と書かれているところから、一六世紀の歴史家クロード・フォーシェがこの作者を「マリ・ド・フランス」と呼んだのが始まりであり、その呼称が今日まで受け継がれているにすぎない。（本稿では多くの「マリ」という名の女性が登場するので、『短編物語集』ほか四作品の作者マリのことを「四作品の作者マリ」（通称マリ・ド・フランス）と呼ぶことにする。）

作品はフランス語で著わされており、献呈先として記されている名前などから、「四作品の作者マリ」はイングランド国王ヘンリー二世の宮廷と深い関わりがあったと推定されている。『聖パトリックの煉獄』を翻案しているところから、ラテン語を解しただけでなく、博く古典文学一般に精通していたことが随所の表現から読み取れる。また『寓話集』を翻案していることから英語が堪能だったのは自明であり、育ちについての推測がかなり限定されてくるのである。

「四作品の作者マリ」とは誰か――四つの仮説

「四作品の作者マリ」（通称マリ・ド・フランス）の実像について、歴史上のしかじかの女性が該当するのではないかと、いくつもの仮説が提案されてきた。たとえば、マリ・ド・ムーラン説（アーバン・ホームズほかの主張）、レディング女子修道院長のマリ説（エジオ・レヴィほか）、シャフツベリ女子修道院長のマリア・オステリ説（ジョン＝チャールズ・フォックスほか）、ブーローニュ伯夫人マリ・ド・ブロワ説（アントワネット・クナブトンほか）などである。著者はそれぞれの女性について、制作年代との矛盾などをあげながら、「四作品の作者マリ」ではあり得ないと論駁している。

トマス・ベケットの生涯

トマス・ベケットは一一一七年にロンドンで生まれた。イングランドのキリスト教界において最も重要な拠点カンタベリーで学び、ボローニャに留学、帰国後聖職者の道を歩み、国王ヘンリー二世の大法官となる。さらに一一六二年にはヘンリー二世の推挙もあって、カンタベリー大司教に任ぜられる。当初は腹心としてヘンリー二世の治世に協力していたが、大司教になると大法官の職を辞し、教皇に仕える者として教会権力の伸張

れ、パリやシャルトルで学んだ聖職者知識人たちが精神的連帯を表明して周りに集まってきた。ソールズベリのジョンも真っ

からである。

本書の著者カルラ・ロッシは、この記述を「装われた身分表明」だと解釈する。以下にみられる状況からして、作者にはそのような装った立場を表明すべき必然性があったとするのである。そして、マリ・ベケット自身がまさにその立場にあったことを論証し、ゆえに彼女こそが「四作品の作者マリ」（通称マリ・ド・フランス）その人である可能性が高いと結論づける。これが本書の最も重要なポイントである。

ヘンリー二世の宮廷の歴史的・文化的背景

一〇六六年のウイリアム征服王（ギョーム一世）によるイングランド征服とノルマン朝の樹立からおよそ九〇年後、イングランド王位についたヘンリー二世（一一三三―八九、在位一一五四―八九）は、父方（アンジュー伯ジョフロワ四世）と母方（ヘンリー一世の娘マティルダ）の相続に加えて、アリエノール・ダキテーヌとの婚姻に伴う広大な所領を併せ、ピレネーから南フランスとイングランドにまたがるアンジュー帝国を築きあげ、プランタジュネット王朝を名乗ってフランス・カペー王朝のルイ七世に対抗するに至る。しかしながら、領土的にはフランス王朝をはるかにしのぐとは言え、王位の歴史、由緒については引け目を感じないではいなかった。

ヘンリー二世の宮廷では多数の民族、言語、精神性が混在していたとされる。主なものは北のフランス人、南フランスのオクシタン人、サクソン人、ウエールズ、スコットランド、アイルランド、フランス・ブルターニュのケルト（ブルトン）人の四つの民族・文化であった。

そうした状況下で、ヘンリー二世は長い歴史をもつフランスの王朝に対抗し、イングランド王位の権威を高めるために、ヴァースとブノワ・ド・サント＝モールの二人を歴史編纂官に任命して著述の任に当たらせた。ヴァースは『ブリュ物語』（一一五五年）と『ルー物語』（一一六〇―七四年頃）を、ブノワ・ド・サント＝モールは『ノルマンディ公年代記』（一一七五年）を著わした。いずれもフランス語（アングロ・ノルマン語）で記されている。『ブリュ物語』では、ブルトン人の祖先はエネアスの曾孫ブルトゥスだとし、プランタジュネット王朝の起源がトロイまで遡ると説いているが、これは元になったジェフリ・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』（一一三五―三八年頃、ラテン語）の記述を踏襲したものである。イングランド王位は、かくして古代地中海世界の末裔として位置づけられたのである。

イングランドの知的雰囲気にはフランスに対する対抗意識と併行して、大陸にまたがる王朝として、フランス文化に対する敬意、賞賛の念、フランス文化そのものへの帰属意識もあった。言語について言えば、ラテン語の理解がごく一部の知識階級に限られていたので、上流階級のより多くの人々を対象とした著述には、英語ではなくフランス語が用いられた。ヘンリー二世の宮廷のみでなく、カンタベリーをはじめとする各地の修道院

マスおよびマリ・ベケットの生涯から分かる通り、マリ・ベケットは「フランスの生まれ」でも「フランスの出身」でもない

においても同様で、フランス語による聖人伝が相次いだのもその現れである。たとえばバーキング女子修道院における『聖女カトリーヌ伝』、『聖エドワール伝』、『聖女オドレ伝』の三つは、いずれもラテン語作品からの翻案である。

作品中での言説

イングランドの知識人たちが置かれていた知的雰囲気は、その著作活動に反映されている。ラテン語を解さない騎士階級の聴衆・読者に、フランス語を通じて古代の歴史や文化を知る喜びを広めようとする態度である。ブノワ・ド・サント＝モールは『トロイ物語』のなかで、「人は自らの知識を隠すべきではなく／進んでそれを開示すべきである」（三―四行）と書く。「四作品の作者マリ」も、「神から叡智と／雄弁の才を授かった者は／己を隠したり黙したりすべきではなく／進んで自分の知っていることを見せるべきである」（『短編物語集』プロローグ、一―四行）とし、自らを名乗るに際しても、「私のことが記憶され続けるように／ここにマリという私の名前を書きます」（『聖女オドレ伝』四六二四―二五行）と述べている。

作者自身によるこのような言説は、先にみたイングランドの歴史的・文化的背景のなかで著作する者のごく自然な立場表明であろう。すなわち、自分が身につけた知識は広く人々に伝えなければならないとする意識であり、だからこそ自分はフランス語で書くのだという姿勢が背後を支えていると考えてよかろう。そのフランス語について、ゲルヌ・ド・ポン・サント＝マクサンスは次のように言明する。「私のフランス語は美しい、なぜなら私はフランスの生まれだからです」（『聖トマ・ベケット伝』六一六五行）。「四作品の作者マリ」による「フランスの生まれ」という表明も、同じ流れのなかで受け取るべきであろう。「記憶され続けるために私は自分を名乗ります／私はマリという名前で、フランスの生まれです」（『寓話集』エピローグ、三―四行）。

こうした雰囲気のなかで事実とは異なる立場（出自）が表明されたとしても、格別不自然・不誠実なことではないのではなかろうか。これが著者の主張であり、作者の分身として「装われた作者像」を作り上げているとみるのである。

既述のように「四作品の作者マリ」はイソップの流れを汲む『寓話集』を英語から翻案しているが、「フランスの生まれ」という生い立ちが事実であるなら、そのような女性がどうしてイングランドの土着言語を理解することができたのかという、逆の疑問が生じる。「フランスの生まれ」を「装われた作者像」とといれば、問題は一挙に解決することになる。

著者はまた、『寓話集』のなかに『ポリクラティクス』からとられた箇所があることを指摘し、一体どのような女性がプランタジュネット宮廷で『ポリクラティクス』を読むことができたであろうか、と論を進める。『ポリクラティクス』というのはソールズベリのジョンによって一一五九年頃著わされた政治哲学・倫理の書であり、当時未だ大法官であったトマス・ベケットに献じられている。国王ヘンリ二世とソールズベリのジョンとは緊張した関係にあり、国王権力の制限にも通じかねない同書は限られた範囲でしか読まれなかったとされている。「四作品の作者マリ」はそのような著作に直接アクセスすることが出来た女性なのである。「四作品の作者マリ」がマリ・ベケットならば、この問題も氷解することになる。

び『寓話集』を最も完全な姿で残し、原作品に遡るうえで最重要と目される大英図書館所蔵の「ハーレー、九七八番写本」に着目し、「四作品の作者マリ」はマリ・ベケットであることを強く推測させる有力な手がかりとみなしている。同写本には、トマス・ベケット家の家系に関するテクスト、トマス・ベケットの祖先の手になるテクスト、トマス・ベケット自身のテクスト、トマス・ベケットの子孫たちによる各テクストが順番に収

作者自身によるこのような言説は、先にみたイングランドの歴史的・文化的背景のなかで著作する者のごく自然な立場表明であろう。すなわち、自分が身につけた知識は広く人々に伝えなければならないとする意識であり、だからこそ自分はフランス語で書くのだという姿勢が背後を支えていると考えてよかろ

著者はまた、『寓話集』のなかに『ポリクラティクス』からとられた箇所があることを指摘し、一体どのような女性がブランタジュネット宮廷で『ポリクラティクス』を読むことができたであろうか、と論を進める。『ポリクラティクス』というのはソールズベリのジョンによって一一五九年頃著わされた政治哲学・倫理の書であり、当時未だ大法官であったトマス・ベケットに献じられている。国王ヘンリ二世とソールズベリのジョンとは緊張した関係にあり、国王権力の制限にも通じかねない同書は限られた範囲でしか読まれなかったとされている。「四作品の作者マリ」はそのような著作に直接アクセスすることが出来た女性なのである。「四作品の作者マリ」がマリ・ベケットならば、この問題も氷解することになる。

ハーレー、九七八番写本

以上のような状況証拠の積み重ねが、「四作品の作者マリ」とはマリ・ベケットのことであると推論する著者の大きな柱であり、本書の題名『マリ・ド・フランスとカンタベリの知識人たち』が端的に示すところでもある。

著者の論拠にはもう一つの大きな柱がある。他でもない、写本伝承の研究である。「四作品の作者マリ」の手になる原作品を今に伝える写本類を徹底的に調査し、古写本学ないし古書冊学の成果を軸に、それぞれの来歴、制作年代（ときに年月日まで）、制作地、制作依頼者、被献呈者、制作の事情等をあたう限り詳細に究明して、作者特定の範囲を狭めようとしている。その際、そのような写本制作の外的な状況だけでなく、同一写本内に録されている他のテクストとの関連も、時に有効な情報をもたらすのは当然のことである。

なかでも、『短編物語集』（一二編の短編物語とプロローグ）および『寓話集』を最も完全な姿で残し、原作品に遡るうえで最重要と目される大英図書館所蔵の「ハーレー、九七八番写本」に着目し、「四作品の作者マリ」はマリ・ベケットであることを強く推測させる有力な手がかりとみなしている。同写本には、トマス・ベケット家の家系に関するテクスト、トマス・ベケットの祖先の手になるテクスト、トマス・ベケット自身のテクスト、トマス・ベケットの子孫たちによる各テクストが順番に収録されており、「ハーレー、九七八番写本」全体がほぼ、いわばトマス・ベケット家一族のテクストの集積の観を呈しているという。「四作品の作者マリ」による『短編物語集』と『寓話集』はトマス・ベケットの次の世代の人たちのテクストの第二番目に収められている。したがってそれらの作者、「四作品の作者マリ」は、トマス・ベケット一族内の人物、すなわちトマス・ベケットに続く一族の一人であるマリ・ベケットと考えるのが最も自然なこととなるのである。

以上のように、「四作品の作者マリ」とはマリ・ベケットのことではないかとする著者の論拠をなす二本の柱は、いずれも決定的なものではない。個人を同定する法的文書の類とか、マリ・ベケット本人による「四作品は私が書いた」という発言とか、「四作品はマリ・ベケットが書いた」という周囲の証言の類が見つかったというものではない。したがって、「四作品の作者マリ」はマリ・ベケットその人である、と断定を下すうえでは留保が残る。しかし、詳細な状況証拠を積み重ねた推論に

はそれなりの説得力があり、作者と作品の周縁に光を当てた貴重な労作と言えるのではなかろうか。

著者カルラ・ロッシ

本書の著者カルラ・ロッシはイタリア出身の女性研究者で、スイスのフリブール大学で博士の学位を取得、現在はチューリッヒ大学に所属している。女史は『シャルルマーニュの巡礼（旅行）』の唯一写本（大英図書館、旧王室コレクション、一六E VIII番）が、一八七九年六月七日にある利用者によって閲覧されて以来行方不明になっている件に関し、最終利用者の生い立ち、家族環境、受けた教育、当時従事していた仕事、友人関係、その後の結婚、転居等々を調査する一方、イギリス、ドイツ、オーストリア、イタリアの関連する土地や施設にたびたび足を運び、一〇〇年以上前の高等学校や大学の学籍簿に当たるなど、一一年間にわたって追究してきたことで知られる。二〇〇四年にフリブール大学に提出した学位論文はその結実であり、後に『失われた「シャルルマーニュの旅行」写本』というタイトルで公刊されている。[2] 引き続き、同書の要約とその後の探索の結果を加えた『シャルルマーニュの旅行』の失われた王室一六E VIII番写本の謎を解く手がかり」という論文が『ロマニア』誌に掲載された。[3] この探究結果は貴重なものであり、掲載を決定した『ロマニア』誌の責任編集者の一人ミシェル・ザンク氏も、ロマンス語文献学界で実際に起こった出来事の、スリルに富んだ労作、と高く評価している。

筆者は同論文を読んで、ロッシ女史のロマンス語文献学に関する該博な知識、謎の解明に対する強固な執念、並々ならぬ行動力に圧倒されたが、このたび本書を繙き、『シャルルマーニュの巡礼』写本の行方探究にあれほど膨大な時間とエネルギーを費やす傍ら、同じ時期に、それに負けず劣らずの本研究を推進していたことに、あらためて驚嘆の念を禁じ得ない。

女史は近年チューリッヒ大学を拠点として「ベケット・プロジェクト」を立ち上げ、来る二〇一〇年一〇月には「聖トマス・ベケットと中世俗語文学」をテーマとする国際学会の開催を企画、ミシェル・ザンク氏の参加も予定されている。

註

(1) June Hall McCash, « *La vie seinte Audree* : A fourth text by Marie de France ? », in *Speculum*, 77-3 (2002), pp.744-777. *The Life of Saint Audrey. A Text by Marie de France* ; translated and edited by June Hall McCash and Judith Clark Barban, Jefferson, North Carolina (McFarland), 2006.

(2) Calra Rossi, *Il manoscritto perduto del 'Voyage de Charlemagne'*, Rome (Salerno Editrice), 2005.

(3) Calra Rossi, A Clue to the Fate of the lost Ms. Royal 16 E VIII, Copy of the *Voyage de Charlemagne*, in *Romania*, t. 126 (2008), pp.245-252. なお、原野昇「一写本の運命」、『広島大学フランス文学研究』二八号（二〇〇九）、一―一〇ページに同論文の全文が翻訳・紹介されている。

アベラール『書簡』、エロイーズ『書簡』

――中世ラテン文学と中世フランス文学

佐佐木茂美